

目的 関東北部山岳地帯は関東文化と東北・上信越文化の接点ともいふべき地帯であり生活文化の伝播と類似性を探るに最も適している。「農服研究の資料収集は目下の急務である」との警鐘が鳴らされてから、ゆうに半世紀を越える。この間に才二次世界大戦を経て生業形態・生活様式は十数年前までは僅かに命脈を保っていたが、現在全く一変している。古い伝統と慣習・生活態様の変化を生活意識の視座からとらえてみることにした。

方法 調査地域 群馬県最東北部片品村、同北端の水上町、西端の嬬恋村、栃木県最北西部の栗山村などを訪れ、聞きとり調査を実施した。地勢的には白根山(2578メートル)を始めとする2000~1500メートルを越す山岳地帯で気温は平均10℃、地形の複雑さか、気温変化の激しさにつながっている地域である。栗山村は栃木県下の最寒冷地とされている。

結果 この地域の厳しい気象条件と苛酷な労働条件に制約された衣生活であった。装飾性より機能性が優先され、個々の衣服にはその必要性から形態上に種種の工夫改良がはかられている。しかし基本的には保守的な伝統が伝承され変化への対応は遅延したことなどが特徴としてあげられる。このような衣生活はその背後にある生活の場における諸条件と一帯となったものである、またそこで生活する人人の生活意識に濃厚に反映していることが聞きとり調査による多くの実例により立証された。